

文化 第七十九卷 第三・四号 一秋・冬一 別刷
平成二十八年三月二十五日発行

大渕憲一教授の業績と学風

辻 本 昌 弘



大渕憲一教授の業績と学風

辻 本 昌 弘

大渕憲一先生は二〇一六年三月、定年により東北

大学を退職される。大渕先生は東北大学大学院文学研究科で学ばれたあと、一九七七年より大阪教育大学にお勤めになり、一九八八年に東北大学文学部に着任された。以来、助教授、教授として本学における社会心理学の研究と教育に尽力されてきた。長年の研究により大渕先生が心理学に残された足跡は途方もなく大きい。こころみに東北大学のホームページに公開されている研究業績を見ると、著書、論文、総説などあわせて四百点以上にのぼる。これだけでも桁外れの力量をもつ研究者であったことがわかる。

膨大な研究業績のうち、まず紹介すべきは、研究者としての地歩を固めた若き頃の攻撃性研究であろう。

暴力、加罰、やつ当たりなどさまざまな攻撃行動の背後にあるメカニズムを社会心理学の立場から解明した

ものである。

大渕先生は実験や調査など多彩な手法を駆使し、共感性、不快情動、謝罪、原因帰属といったさまざまな要因が攻撃行動といかに関連しているのか、ひとつひとつ解明していった。その成果のなかには、*Journal of Personality and Social Psychology* など社会心理学を代表する国際学術誌に掲載されたものがある。今でこそ英語で論文を書くことが強く求められているが、大渕先生が攻撃性研究を推進した一九八〇年代はそれほどなかったのではないだろうか。当時の大渕先生は、新進気鋭の学者として研究成果を「攻撃的」に世界に発信し、高く評価されたのである。

大渕先生の攻撃性研究は、最終的に「攻撃の二過程モデル」として理論的に結実した。攻撃行動をめぐる従来の学説としては、フロイトのように攻撃的な

欲望を人間の内側から自然に湧いてくるものとみなす
 内的衝動説、攻撃を不快な感情の発散とみなす情動発
 散説、攻撃を特定の目的を達成するための戦略的手段
 とみなす社会的機能説がある。長年の研究を踏まえ
 て、大淵先生は内的衝動説をしりぞけ、情動発散説と
 社会的機能説を統合する攻撃の二過程モデルを提案し
 た。先生が攻撃性研究の成果をまとめた著書『人を傷
 つける心―攻撃性の社会心理学―』（サイエンス社、
 一九九三年）の最終章は二過程モデルの解説にあてら
 れ、最後の一文を「このモデルはこれまで攻撃行動に
 関して提供されてきた実証的な資料のほとんどを説明
 可能と思われます」と結んでいる。徹底的に調べ尽く
 したという自負が漲る、すがすがしい結語である。

攻撃性が若き頃の研究テーマだったとすれば、円熟
 の研究者として推進されたのが紛争と葛藤の研究であ
 る。夫婦の葛藤、職場の葛藤、裁判紛争、民族紛争な
 どさまざまな現実問題に目を配りながら、それらの背
 後にある一般的なメカニズムを、社会心理学の立場か
 ら解明したものである。

ここでも多くの実証的知見が生み出されたが、理
 論的結実として挙げられるのが「葛藤解決の多目標理
 論」である。葛藤の渦中にある者はさまざまな目標を
 もっている。たとえば個人的利益を守ることが目標に

なることもあるし、不公平を正すことが目標になるこ
 ともある。葛藤解決の多目標理論は、どの目標が強い
 かによって方略選択（対決か協調か）が規定され、さ
 らには葛藤解決のあり様も左右されることを見出した
 ものである。

紛争と葛藤に関する長年の研究をまとめられたのが
 著書『紛争と葛藤の心理学―人はなぜ争い、どう和解
 するのか―』（サイエンス社、二〇一五年）である。
 同書ではこんなふうに論点が提起されている―そもそ
 も、対話による葛藤解決が望ましいことは誰でも知っ
 ている。問題は、対話による解決が望ましいとわかっ
 ているながら、さまざまな心理的障壁によりそれを実践
 できないことにある。同書で大淵先生は、認知バイア
 スなど葛藤解決を妨げる心理的障壁の正体を明らかに
 するとともに、これを打ち破る条件をくわしく検討し
 ている。

もうひとつ大淵先生の代表的業績として忘れてなら
 ないのは、「公正の絆」をめぐる一連の研究である。そ
 の成果は編著書『日本人の公正観―公正は個人と社会
 を結ぶ絆か?―』（現代図書、二〇〇四年）にまとめら
 れている。

公正の絆とは何か。人々は、自分の所属する社会
 や組織が公正に運営されているかどうかに関心する

もっている。社会や組織を公正だと評価した場合には誇りや愛着をもつが、不公正だと評価した場合には誇りや愛着をもてない。そういった意味で、公正は、個人を社会に結びつける絆なのである。言い方をかえると、愛国心や愛社精神などを声高に叫んだりせずとも、社会や組織が公正に運営されていれば、おのずからそういったものを人々がもつようになるということである。

公正の絆について、さまざまな個別テーマのもと実証研究が推進された。その代表的な成果が、大淵先生と共同研究者による論文「Procedural justice and the assessment of civil justice in Japan」(*Law and Society Review*, 2005)である。民事裁判の当事者に対する調査から、裁判結果の有利さだけでなく、審理の手続きが公正だと評価されることで、裁判に対する満足感、裁判制度に対する信頼が高まることを確認したものである。この研究成果は権威ある国際学術誌に掲載されるとともに、国の司法制度改革審議会において報告・討議されることとなり、近年の司法制度改革に貢献するものとなった。

こういった研究を推進されてきたことから、大淵先生は法務省、裁判所、警察などでの研修会にたびたび招かれることとなり、近年の司法制度改革、また犯罪

や非行への対応などで多大な貢献をなされた。大淵先生の研究はアカデミズムのなかに閉じ籠ったものではなく、現代日本が直面する喫緊の問題と鋭く切り結んだものでもあったのである。

ここまで攻撃性、紛争と葛藤、公正の絆に関する研究を紹介してきたが、これらを貫く大淵先生の学風はいかなるものか―それを一言に集約するなら「理論性の高さ」であろう。モデルや概念を徹底的に磨き上げ、明晰な理論的視点を定めたいうえで現象に立ち向かう。そこには社会心理学の本質に対する大淵先生の深い洞察があったと忖度する。

大淵先生は、著書『人を傷つける心』において、攻撃行動を「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義したうえで、こう解説されている。

うっかり人にぶつかっても、それは攻撃とは言いません。故意に危害を加えようとしたものではないからです。…ある行動を攻撃と判断する際、危害意図は本質的要素です。しかし、意図の重要性は攻撃に限りません。援助、共同、競争といった他の対人行動もすべて行為者の意図によって行動の性質が定義されます。社会的文脈で起こる行動を理解するには、行為者の内的要素が不可欠です。

でも大きく紹介されたものである。

ここには重要な含意がある。そもそも「意図」とは何のことなのだろうか。さまざまな見解があろうが、直接に目で見たり手で触ったりできるような形あるモノとして実在するものではないことは確かである。社会心理学は、このように不定形な内的要素——意図、人格、動機など——を伝統的に重視してきた。社会心理学があつかう対象は本質的に不定形なものである、それゆえに虚心坦懐に観察するだけでは何も見えてこない。明晰な理論的視点を定めてこそ、不定形なものがあるものとして見えてくる——大淵先生はそうお考えだったのだと思えてならない。理論仮説を明確に立てて研究を進めるよう学生を徹底的に指導されたのも、そういったお考えの現れだったのだろう。

意図のような内的要素が社会行動においていかなる役割を果たしているのか、大淵先生は卓越した研究により実証的に解明されてきた。たとえば大淵先生と共同研究者による論文「Attacker's intent and awareness of outcome, impression management, and retaliation」

(*Journal of Experimental Social Psychology*, 1985) では、巧妙に工夫された実験により、危害の意図性の知覚により被害者の報復攻撃が異なることが鮮やかに示されている。この論文は、欧米の社会心理学の教科書

意図、人格、動機といった内的要素は構成概念とも呼ばれる。大淵先生は構成概念を自在に駆使されたが、同時にその危険性も認識されていた。構成概念をつぎつぎに濫造し、あぐくのはてに構成概念同士の関係を論じ始めると無茶苦茶なことになる。筆者は大学院生だった頃に大淵先生から指導を受けたことがあるが、ある時こんな忠告をいただいた——内的要素同士の関係を調べるばかりでは駄目で、内的要素がどういった現実の行動を引き起こすのか調べなさい。大淵先生とは心理学講座の教員としてもおつきあいしたが、心理尺度によって構成概念同士の関連を調べる研究を強く批判されるのを何度か目にしたことがある。現実の行動との関連をみることなしに構成概念をこねくりまわしてはならない——すべての心理学徒が肝に銘じるべき教えであろう。

もうひとつ触れなければならないのは、大淵先生の卓越した理論構築力である。大淵先生は膨大な実証研究を行い、その知見を理論モデルにまとめあげてきた。攻撃の二過程モデルであり、あるいは公正の絆理論である。実証研究を精力的に行うのは大変なことなのだが、おおくの社会心理学者はその大変なことをやる。最高水準の社会心理学者でないとできないのは、

実証研究のさまざまな知見を理論モデルに統合することである。大渕先生は理論モデルを構築できる研究者だった。しかも、実証研究の諸知見を強引に接合するのではなく、スーッと自然に理論モデルにまとめあげてしまう。大渕先生が構築した理論モデルには牽強附会なところがない。

理論性の高さは、また大学院生の指導でも存分に生かされてきたように思う。紛争と葛藤の研究、公正の絆の研究は、大渕先生が指導にあたった大学院生との共同研究だった。大渕先生は、的確な理論的展望のもとに大学院生を組織し、成果を出し続け、俊英の研究者を育成されてきた。

率直にいうと大渕先生の研究に向かう姿勢は厳しい。大阪教育大学時代の大渕先生を知る人が語るところによると、日夜研究に打ち込むその姿は「研究の鬼」といふべきものだったという。それは今にいたるまで変わっていない。東日本大震災直後に大渕先生が東北大学文学研究科長に就任し、危機に瀕した組織の舵取りに見事な手腕を振るわれたことは記憶に新しいが、おなじ時期に日本犯罪心理学会会長でもあった。

当時の大渕先生は激務に追われる日々だったと推察するが、それでも研究成果を出しつづけた。私のような後進は、ついつい「昔の先生は羨ましい、研究する時

間も十分にあって」などと不満を漏らしたくなるのだが、忙しいことを言い訳にはできないことを先生は身をもって示されたように思う。

かくのごとく研究には厳しいのだが、先生のふだんの生活にはどこか優雅なところがある。カフェイン、アルコールなど不摂生が専門の私にいわせれば大渕先生は「健康マニア」である。煙草は若い頃にさっさとおやめになったと聞く。珈琲よりも紅茶をお好みになり、紅茶銘柄に深い造詣をお持ちである。なによりもテニスの愛好ぶりは尋常ではなく、いまや心理学研究室内にテニス部があるようなものである。この生活スタイルが大渕先生の明晰な分析力を支えたのではないかと愚考する次第である。これからも生活スタイルを健康的に保っていただき、さらにご活躍されることを祈ってやまない。